

● 東 北

工 藤 一 郎

東日本大震災5周年に関して様々な動きが見られた。まず、3月4日の岡山シンフォニーホールを皮切りに東北3都市を巡演した「東日本大震災・心の復興祈念コンサート／ブラムス『ドイツ・レクイエム』」（3月6日、盛岡市民文化ホール。同8日、仙台イズミティ21大ホール。同9日、山形形テサホール／指揮：岡山フィル首席指揮者＝ハンスイェルク・シェレンベルガー／ソプラノ：秦茂子、バス：ドミニク・ヴェルナー／監修・合唱指揮：佐々木正利／合唱：岡山パッサカントータ協会、盛岡パッサ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、山響アマデウスコア／管弦楽：岡山フィル）。この大規模企画は、文化庁の「劇場・音楽堂等間ネットワーク構築支援事業」他の助成で実現した。優秀な合唱4団体が全て佐々木の指導を受けている事も大きな要因。「残されて生きる者への慰め」を謳ったこの作品の東北巡演は、まさに時宜を得た企画であった。

2012年に「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」が5年計画で開始した事業「こどものためのコンサート」が最終年を迎えた。これまでにウィーン・フィル有志メンバーが被災地に赴いて活動してきた中、仙台ジュニアオケへのワークショップはほぼ毎年1回のペースで行われてきた。その集大成となる「ジュニアオケ第26回定期」（10月15日、日立システムズホール仙台／指揮：音楽監督・平川範幸）では、17名のウィーン・フィルメンバーがジュニアたちに交じって演奏した。特別出演のディーター・フルーリーは、仙台フィル・ミュージックパートナー・山田和樹の指揮でモーツァルト「フルト協奏曲第2番」を演奏。総じて普段を大きく上回る演奏となり、満席の聴衆を圧倒した。翌16日には会場をサントリーホールに移し、岩手県立宮古高校吹奏楽部と郡山市の中学生による合同オーケストラ&合唱団を加えて「こどもたちのためのコンサート」（山田指揮、最後の「フィンランディア」のみ平川指揮）として演奏し、5年間の活動を締めくくった。この事業はひとまず終了するが、今後5年間にわたって仙台フィル楽団員が被災3県（岩手・宮城・福島）に音楽を届ける「サントリー&仙台フィル／みんなのまちのコンサート」に引き継がれる。

大震災以来、被災地での演奏を続けているピアニスト・小山実稚恵が前年に開始した子供対象の体験型イベント「こどもの夢ひろば“ボレロ”」の2回目が行われた（7月30・31日、日立システムズホール仙台）。小山の「子供たちには新たな一歩を踏み出す勇気や前進する力が必要」との思いを、テーマ音楽としたラヴェル「ボレロ」に重ね、コンサートとそれに並行する各種イベントで構成。オケは前回の仙台フィル（指揮：大野和士）から宮城教育大学交響楽団（指揮：山田和樹）に変わったが、初回に劣らぬ成果を上げて盛況のうちに終了した。

このように3.11以来、被災地に赴く多くの音楽家が旨としていた「寄り添い・慰め・励まし」などから一歩踏み出し、次の段階に進んだ動きが他にも見られる。その一つ、仙台フィル・コンマス西本幸弘が2014年に開始したりサイタルシリーズ「VIOLIN able ～ディスカヴァリー～」がvol.3となった（12月9日、PaToNaホール）。彼の「発見する喜びが復興への力に

つながる」との信念を「ディスカヴァリー」に込めて子供たち対象のワークショップなどを行い、その子らをリサイタルに招待している。ベートーヴェンの10曲のソナタの全曲演奏が目標だが、フランクのソナタなどで深い感銘を残した（ピアノ：山中惇史）。vol.1・2はCD化されている。

仙台フィルが第300回定期を迎えた（4月15・16日、日立システムズホール仙台）。指揮する常任指揮者パスカル・ヴェロが選んだ曲目は、ベルリオーズ「幻想交響曲」と「レリオ、または生への回帰」の2作連続演奏（テノール：ジル・ラゴン、バリトン：宮本益光／レリオ：俳優・渡部ギユウ／佐藤淳一指揮の特別編成合唱団）。わが国では2006年に小林研一郎＝日フィルが上演して以来の稀少な取り組みとなった。公演日が3.11の5周年に近接する事から、本来「死からの再生」を象徴する2作に「被災からの復興」の意味が重ねられ、第1回定期（1974年）以来の歩みの集大成となる大演奏となった。翌17日には、被災後全国から寄せられた支援への感謝を込めて「東京特別演奏会」（サントリーホール）を同内容で行い、満席の聴衆に「東北の雄」の実力を知らしめた。

この高い演奏力は常任：ヴェロ、首席客演：小泉和裕、ミュージック・パートナー：山田和樹を擁する仙台フィルの定期では、今や日常的なレベルになっている。中でも山田指揮で演奏したメンデルスゾーン「オラトリオ『エリヤ』」（1月、第297回定期）は、後世に語り継がれるべき質と内容を示した。

一方、音楽監督：飯森範親、首席客演指揮者：鈴木秀美、正指揮者：大井剛史に率いられた山響も、毎回テーマを掲げて充実した定期公演を行っている。これに勢いを与えているのが2015年度に専務理事・事務局長に就任した西濱秀樹。一時、飯森担当以外の定期を1日公演としていたのを16年度から2日公演に戻し、新企画の実施や他団体との提携拡大などの積極策で、活動状況を向上させている。

恒例の大型イベントが成功裏に終了した。仙台では「仙台国際音楽コンクール（SIMC）」（3年毎開催6回目）と「仙台クラシックフェスティバル（せんくら）」（毎年開催11回目）。山形では「アフィニス夏の音楽祭」（2年毎開催4回目）。

オペラでは「仙台市民文化事業団30周年記念事業／イタリア・ムジカリーヴァフェスティバルオペラ公演『ラ・ボエーム』」（11月9日、イズミティ21大ホール）が、宮里直樹のロドルフォの好演と三浦安浩の好演出で好評。次に「アイリスオーヤマ・クラシックススペシャル『マダム・バタフライ』」（11月12日、東京エレクトロンホール宮城／ヴェロ＝仙台フィル他／演奏会形式）は余裕の高品質。「仙台オペラ協会第41回公演『ヘンゼルとグレーテル』」（9月3・4日、東京エレクトロンホール宮城／芸術監督：佐藤淳一／船橋洋介＝仙台フィル他）はメルヘン調の美術と相俟って広い年齢層を楽しませた。

vol.11となった「Music from PaToNa」シリーズや、第61回を迎えた「山形弦楽四重奏団定期」を始め、仙台フィル・山響とも楽団員による室内楽やソロ活動が近年とみに活況。

番外を二つ。「仙台フィル特別演奏会／オルフ『カルミナ・ブラーナ』」（10月13日、東京エレクトロンホール宮城／山田和樹＝仙台フィル他）。生気・躍動・愉楽溢れる熱演が聴衆の魂を掴んだ。佐々木正利指揮する特別編成合唱団は、確信に満ちた積極的な表現で存在感を示した。

次に、仙台フィルの二人のコンマス（神谷未穂、西本幸弘）とバンドネオンの三浦一馬をソリストにした「ヴィヴァルディ×ピアノソラ／ふたつの四季」（11月3日、川内萩ホール）が、感性を煌めかせた快演。このユニークな企画にも拍手したい。